

超音波に魅せられて！ —超音波検診に賭けた28年—



三原修一

日本赤十字社熊本健康管理センター

〔略歴〕

三原 修一（みはらしゅういち）

日本赤十字社熊本健康管理センター 副所長

<職歴>

昭和55年 熊本大学医学部医学科卒業

昭和55年 長野県厚生連・佐久総合病院外科（研修）

昭和58年 日本赤十字社熊本健康管理センター

平成13年 同 副所長（現在に至る）

平成12年 医学博士（熊本大学）

平成10年 中国ハルビン医科大学客員教授

平成14年 産業医科大学講師（非常勤）

平成19年 熊本大学医学部講師（非常勤）

平成21年 熊本大学薬学部臨床教授

<専門分野>

超音波検査（消化器、腎泌尿器、乳腺・甲状腺）、内視鏡検査（上部消化管、大腸）、マンモグラフィ、消化器病学、がん検診、東洋医学（漢方）

<学会>

日本超音波医学会代議員（指導医、超音波検査士制度委員会委員）、日本人間ドック学会代議員（指導医）、日本消化器がん検診学会評議員（指導医）、日本総合健診医学会審議員（専門医）、日本がん検診診断学会評議員（専門医）、日本農村医学会評議員、日本東洋医学会（漢方専門医）

昭和55年、熊本大学を卒業し、長野県厚生連・佐久総合病院へ外科研修医として赴任した。私と超音波の相思相愛の歴史は、ここから始まる。当時の超音波診断装置は、今と比べると格段にみずばらしいものであった。“胆石が見えればいい”くらいの感覚でしか使われていなかった。この器械を病院中ガラガラと引っ張りまわして検査した。教科書も少なく、自分が検査した患者の手術には必ず立ち会って、実際にお腹の中を見て勉強した。自分が診断した患者を自分で執刀するのも快感であった。そうしているうちに、胆石だけでなく、肝腫瘍、腎腫瘍、膵腫瘍と、いろいろなものが見えるようになってきた。“これはしめた!”と頑張った。面白くて仕方がなかった。2年目に、新しい器械が来た。これまでの、魚群探知機とさして変わらぬ器械とは、雲泥の差であった。益々頑張った。“お前のエコーは心眼か?”と褒められる（冷やかされる?）ようになった。そんな折、“熊本に帰って、健診をやらないか?”という誘いがあった。外科医としても手術が面白くて仕方がない時期、当然断った。しかし、何度となく誘いがあり、一大決心をしてメスを捨てた。外科医から健診医への、華麗な(?)転身である。身につけた超音波検査の技術と外科診断学を、検診(健診)に取り入れてみようかと決断した。

昭和58年8月、日本赤十字社熊本健康管理センターに赴任した。超音波検診を始めたが、とても自分ひとりのできる人数ではない。“よし、技師を養成しよう”。来る日も来る日も、私と技師の二人三脚の戦いが始まった。一生懸命教えても、なかなかうまくならない、受診者は増えていく、あせった。本気で打った、蹴った、怒鳴った。その技師たちが、今は立派な課長となり係長となって、後輩の指導に当たっている。“医者に教える技師になれ!”私の口癖である。技師たちは、いま立派にその役目を果たしている。

技師の養成が進んだのを機に、超音波集団検診を開始した。昭和59年3月21日、記念すべき第一歩は、九州山地のど真ん中、清和村で始まった。春とはいえ雪の降る寒い日、公民館に超音波装置を運び込み、103名の検診を行った。昭和60年には、初の超音波検診車を導入した。それから28年、集団検診・人間ドック合わせて180万人以上が超音波検診を受診し、1,800例以上の癌が発見された。検診車も10台に増え、毎日30名の技師が、施設内であるいは地域・職場で超音波検診を行っている。全国各地から医師や技師が見学・研修に来るようになった。海外からも研修に来るようになった。みんなの努力の成果と思っている。

集団検診の朝は早い。5時、6時出発も当たり前である。まだ暗いうちから、検診車を連れて出かけていく。

受診者も、朝早くから待っている。山間部では、暗い山道を懐中電灯を下げて検診にやってくる。眠い目をこすりながら、一生懸命検査する技師たち。町や村のスタッフも朝早くから検診の準備をしてくれる。信頼の絆は熱い。“どんな僻地に住む人にも、最高の医療を提供したい!”我々の夢が、超音波検診によって現実となっているのである。

検診システムを作るのも、大変な作業であった。当時はコンピューターもなく、すべてが手作業で、スタッフ全員で事後処理を行っていた。検診結果の読影、判定、結果表への記入、管理台帳作成、結果発送、毎晩12時、1時まで行っていた。そんな時代を経て、今のシステムが出来上がっているのである。今はすべて、コンピューター管理されており、当時から思えば、夢を見ているようである。

検診の普及も一大仕事であった。自分で作った検診、何とか普及しようと必死だった。連日市町村を回り、すべての超音波検診受診者を集めて、1回2時間の講演を1日2～4回、年間150回は行なった。夜は夜で、役場の担当者や保健師、時には町長・村長まで引っ張り出して、説得した。(もちろん、酒をたくさん飲ませながら..)彼らは言った。“先生の情熱に負けた。やってみるか!”と。感謝、感謝の気持ちでいっぱいであった。(自腹の出費は痛かったが..)当時お世話になった人たちとはいまだに親交が深く、昔話に花を咲かせている。

平成4年(1992年)からは、下腹部や乳腺・甲状腺の超音波検診も開始した。早期膀胱癌、卵巣癌、早期乳癌・甲状腺癌もたくさん見つかるようになった。どこでも見えるのが、超音波検査の魅力である。気を良くした私(いや、技師たち)は、一日中超音波のとりこになっている。そんな技師たちに、良い器械を使わせてやるのも、私の役目である。検診だから病院で使い古した器械で良からう、なんてもってのほかである。検診の最前線に立つ技師たちにこそ、良い器械を使ってもらって、一生懸命に癌を見つけてもらわねばならない。(当然私は楽になる?)20台あるすべての超音波診断装置を、順次カラードプラ法、THI(ティッシュハーモニックイメージング)法が可能な装置に入れ替えている。もう、そんな時代なのである。

さて、これから私は何をしようかと、ふと考える。自分の施設は、検診体制も事後管理体制もほぼ整った。次は、質の高い超音波検査(検診)を普及していくことだと思っている。最近では、全国各地から講演に呼ばれる。また、各地の医師会など、いろいろな所に講演(and 実技)に出向いている。たいていは夜あるいは土日で、少しきつい時もあるが、これが自分の勤めと思って頑張っている。やはり、“医者(技師)は社会の宝物”でないといけないのである。“生きるとは、ただひたすらに燃えること!”これが私の信条である。(ちょっと、きざっぽいか?)

(平成22年3月11日改)



写真:昭和59年3月21日、清和村の公民館で。
超音波集団検診は、ここから始まった。